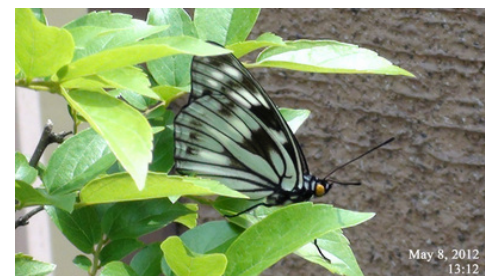


幼虫がエノキの葉を食べるゴマダラチョウは北海道道南から鹿児島南端まで分布する普通種ですが、好きな樹液を吸う際、そのストロー（口吻）がきれいな黄色でよく目立ちます。大人になってもいつまでも口ばしが黄色いチョウで、同様に樹液が大好きなスミナガシはこのストローがみごとに真っ赤という珍しいチョウです。スミナガシは幼虫が初令段階からヤマビワやアワブキという樹木の硬い葉っぱを食べる変わったチョウで、そういう樹木がある環境で発生し、兵庫県では福知溪谷や砥峰高原への登山道で幼虫を見たことがあります。



ゴマダラチョウは高砂市内の西畑や松波町でもよくみかけます。落ち葉の間に隠れて幼虫で越冬し5月下旬にはやや白っぽい第一化春型が、そして6月下旬からその次の世代である夏型が濃いまだら模様になって現れます。母蝶は幼木への産卵を好む傾向があつて、ベランダに鉢



植えとしてあるエノキに飛来して産卵したこともあります。ゴマダラチョウの幼虫は、タテハチョウ科幼虫に比較的多くみられる、滑り落ちない

ように葉表に糸を吐いて足場を確保した居場所とし、そこから出かけていって他の葉っぱを食べ、また元にもどるといった習性があります。この場合アカタテハなどのように巣を作ってくくれるわけではなく葉っぱ上むきだしなのでスズメなどに見つかればひとたまりもありません。2008年6月に西畑テニスコート横にあるエノキで幼虫を見つけ、スズメが多い所なので家に持ち帰って羽化させてから放してやりました。タテハチョウの中でもこのチョウの飛翔はとりわけ軽快で、スイスイと流れるように長い距離を滑空します。テニスの試合中に木々の樹冠をすべるように飛ぶゴマダラチョウに気づくとつい集中力を欠いてしまいますが、うれしいひとときです。



ところでこのゴマダラチョウは非常に珍しい記録をもつチョウで、約10万年前の地層とされる栃木県の塩原湖成層から本種の春型♀と考えられる化石が発見されています。5-6万年前、朝鮮半島と日本列島とが陸続きであった氷河期の生き残り「生きた化石」だといわれるチョウセンアカシジミや氷河時代の遺物といわれるウスバシロチョウなどありますが、日本ではゴマダラチョウ以外に、栃木で洪積世中期（筆者注：50万年前）のミヤマカラスアゲハ、神戸市の白川峠で中世期のものと考えられるタテハチョウ科らしい化石、兵庫温泉町で大型タテハチョウの化石が発見されているそうです（渡辺康之著「チョウ①」保育社、1991、p.181）。